

<節分ー追儼（ついな）ー>

節分とは各季節の始まりの日（立春・立夏・立秋・立冬）の前日のことだが、現在では立春の前日である。立春はその名の通り、春が始まるわけだが、旧暦の正月もほぼ立春前後からすれば、節分は1年の区切りとも言え、豆をまいて邪を祓う節分の豆まきは、1年の大祓とも言える。この節分行事の真意は何なのだろうか？

(1) 定説（Wikipedia 参照）

季節の変わり目には邪気（鬼）が生じると考えられており、それを追い祓うための悪霊祓い行事が執り行われる。

節分の行事は宮中での年中行事であり、延喜式に依ると、彩色した土で作成した牛と童子の人形を大内裏の各門に飾っていた。「土牛童子」とも言われ、大寒の日の前夜の夜半に立てられ、立春の日の前夜の夜半に撤去された。

これは、平安時代頃から行われている追儼から派生したものだが、古代支那では大晦日に、鬼の面を被った人を桃の木で作った弓矢で射って追い祓い追儼という行事があり、これが奈良時代の日本に伝わり、平安時代には宮中で盛んに行われたのである。

邪気を追い祓うための豆まきは、宇多天皇の時代に鞍馬山の鬼が出て来て都を荒らすのを、祈祷をして鬼の穴を封じ、三石三升の炒り豆（大豆）で鬼の目を打ちつぶし、災厄を逃れたという故事伝説が始まりとされる。豆は「穀物には生命力と魔除けの呪力が備わっている」という信仰、語呂合わせで「魔目」を鬼の目に投げつけて鬼を滅する「魔滅」に通じ、鬼に豆をぶつけることにより邪気を追い祓い、1年の無病息災を願うという意味合いがあるとされる。

鬼は邪気の象徴なので、ここで重要なのは、追儼である。

(2) 古代ローマ由來說 (<http://ibdhotnews.exblog.jp/7877481/>)

以前、テレビ東京の「新設！？日本ミステリー」という番組で、豆まきの古代ローマ由來說が紹介されていた。それを更に詳しく調べたものから抜粋する。古代ローマの詩人オウィディウスの『祭暦』のレムリア祭に関する記述である。

・『祭暦』5巻 429-444

夜はすでに丑三つ時で、睡眠に静寂を提供し、犬や種々の鳥達よ、お前達も眠り込んでしまった。

古い儀式を忘れず、神々を畏れている者は起き上がり（両の足には何をも結ばず）、親指を中にした拳の印を結び、卑しい霊（lemur、レムル）が自分を襲わないようにする。

廻り歩いて黒い豆を手取る前に、常に手を泉の水で洗い清める。そして背を向けて投げる。投げると同時に言う。「私はこれら（供物）を投げる。これらの豆によって、私と私の家族を私は贖って救う。」

振り向かずにこれを 9 回言う。もし振り返って見なければ、霊は拾い集め、そして後を追うと信じられている。

再び水に触れ、テメサ産の（青）銅器を大きく鳴らし、霊が自分達の家々から出て行く事を願う。「祖先の亡霊よ出て行け」と 9 回言い終えると振り向いて、これで秘儀が完璧に遂行されたとする。

親指を中にした拳の印は、葬式会場や霊柩車が通る際にあの世と一緒に連れて行かれないように、あるいは自分の親と一緒に連れて行かれないように両手の親指を握りこぶしの中に隠すという日本の風習と類似しているし、神事の前に手を水で洗い清めることも類似している。

しかし、古代ローマでは黒い豆を使用し、豆を後ろに投げていたようである。この点について、明治期の文献集『古事類苑』に興味深いことが記載されている。

- ・節分の夜、白大豆を黒くなるほど煎って、弦（つる）をかけたマスに入れ、それを箕（み）に入れて持参し、「福は内」と 3 回言い、「鬼は外」と 1 回言い、3 度ずつまく。
- ・節分では、夜になってお酒を飲む行事がある。この時に豆を打ちまく行事がある。お酒を飲む行事が終わって、この豆を女官が各部屋に打ちまく。小さな四角いホカイ（食べ物を運ぶための容器）に煎った豆を入れて、三方に乗せてこれを神前（あるいは仏前）へお供えする。お酒を飲む行事が終わって、女官がこのホカイを 2 つ並べて、間に渡した担ぎ棒の真ん中を左手で下げ持って、右手で後ろへ 3 度打ちまく。この時、女官は腰巻に袴を着て、びんすべらかしの髪型に結う。
- ・2 つの折櫃の縁を合わせて、2 つとも左手に取って、2 つの折櫃の中の豆の上を覆っている土器（かわらけ、素焼きの皿）を右手で取って、豆を恵方へ向かって 3 度打ちまく。恵方がもし後ろの方向ならば、後ろに打ちまく。打ちまき終わると、三方の上に置く。配膳されたものを句当（こうとう）に渡す。句当はこの折を左の手で取って、立った姿勢で後ろの方向へ右手で 1 回に 3 度ずつ打ちまいて、宮殿の中から風呂場の上まで打ちまきながら廻る。
- ・浅間神社には神職が大勢出仕して、鬼追いの豆を打ちまいて、本社から末社まで一斉に手でもって戸を激しく打つ。付近の町中には地震のように聞こえる。これを聞いて、各家では一斉に豆を打ちまき、家の外に出て、各家の全男子が自分の家の蔀を叩き、話す声も聞こえなくなるほどで、雷のように鳴り響いて、しばらくの間、恐怖を感じるほどである。

どうやら、かつては煎って黒くなった豆を後ろ手にまいていたようで、所によっては、豆まき後に大きな音を鳴らしていたようである。すなわち、古代ローマの風習とほぼ同じようなことが、かつては行われていたのである。

しかし、驚くことは無い。イナンナを主神とするフェニキア人がイタリア半島に渡来し、日本にもその流れを汲む者たちが渡来したことからすると、豆まきの風習が類似していても当然なのである。詳しくは＜日本の真相 6＞を参照して頂きたいが、そこでは日本とフェニキアの風習や神事が比較検討され、また＜宇宙維新 黄金の夜明け＞では、登場人物の建がイタリア人と大阪人の共通点を冗談交じりに明かしている。

(3) 追儼

ここで、重要な追儼について考察する。日本に於ける追儼の発祥は、五山の送り火をすべて見る事ができる秦氏の重要拠点、吉田神社である。吉田神社発祥の吉田神道は宮中の白川伯家主導の伯家神道と勢力を争い、最終的には伯家神道を宮中のみに限定し、江戸幕府から神道免許状を交付する権利まで認めてもらった神道である。こう書くと、吉田神道は如何にも悪い印象があるが、そうではない。伯家神道は古来より朝廷に伝わる祭祀の作法を口伝により伝承していたのに対し、吉田神道はそれまでの神道説を整理して教義を確立したため、在野に普及するのに適していたのである。

・吉田神社追儼式(ついなしき)

2月2日の午後6時に本宮に於いて行われる。まず、怒り、悲しみ、苦しみを表す赤、青、黄の鬼が表の鳥居から境内に乱入する。続いて大舎人（おおとねり）が黄金4つ目の仮面を被って玄衣朱裳（げんいしゅしょう）を着装し、盾と矛を持って方相氏（ほうそうし）となり、仮子（しんし）という小童を多数従えて来る。

陰陽師が祭文を奏し終わると、方相氏が大声を發し、矛で盾を3度打ち、群臣呼応して鬼を追い、舞殿を巡る。最後に、上卿（しょうけい）以下3人の殿上人が桃弓で葦矢を3回放ち、疫鬼を追い払う。

まず鬼の色だが、赤、青、緑ならば混合して透明となり、光の三原色で神を暗示するが、ここでは色の三原色で、混合すると黒になるから、まさに暗黒の邪気の象徴である。

鬼を追う方相氏は支那由来で、最後に3人が3回矢を放つのは、「生命の樹」の三神三界を暗示し、密教に於いて魔を退散させるとされる九字切りでもある。桃は邪気を祓うとされるが、それは西王母伝説の不老不死の仙桃に因む。

*西王母伝説（＜神々の真相 2＞より抜粋）

すべての女仙たちを統率する。西王母の本来の姿は“天厲五残（疫病と5種類の刑罰）”を司る鬼神であり、『山海経』には次のようにある。

“人間の女の顔に獣（虎の類など）の体、蓬髪（乱れた髪）に玉勝（宝玉の頭飾）を付ける。虎の牙を持ち、よく唸る。咆哮は千里に轟いて、あらゆる生き物を怯えさせ、蛇の尾を振れば、たちまち氾濫が起きる。西王母には大黎、小黎、青鳥という3羽の猛禽が従っており、王母の求めに応じて獲物を捕らえ、

食事として捧げる。”

最初は人間の非業の死を司る死神であったが、“死を司る存在を崇め祭れば、非業の死を免れられる”という、恐れから発生する信仰によって、徐々に“不老不死の力を与える神女”というイメージに変化していった。やがて道教が成立すると、西王母はかつての“人頭獣身の鬼神”から“天界の美しき最高仙女”へと完全に變化し、不老不死の仙桃を管理する、艶やかにして麗しい天の女主人として、絶大な信仰を集めるようになった。王母へ生贄を運ぶ役目だった青鳥も、“西王母が宴を開くときに出す使い鳥”という役に姿を変え、やがては青鳥と言えは“知らせ、手紙”という意味に用いられるほどになった。(ここまで Wikipedia 引用。)

容貌は女の顔、獣の体、虎の牙、蛇の尾でメルカバーを形成する。ならば、カバラである。死を司った冥界の女神はイナンナの姉エレシュキガルであるが、カバラ＝知恵を操れるのはイナンナであり、イナンナは冥界にも下っている。

イナンナはインダス文明の主神となり、インダスの女神、とりわけ主神シヴァ神の分身の 1 つ、暗黒のカーリーでもあり、宗教に於ける暗黒の側面の原型となった。これが、“人頭獣身の鬼神”の意味である。また、イナンナは美の女神ヴィーナスでもあるから“天界の美しき最高仙女”でもある。

そして、“西王母”は文字通り“支那から見て西の王母”であり、それはインドやシュメールである。そこの女神であらゆる宗教の女神の原型となっているのはイナンナである。

さて、桃は支那由来の邪気を祓う物であり、イザナギが黄泉の国から帰る時、鬼に追われた際に投げつけた。支那の桃は西王母伝説に依り、その西王母は支那から見て西の国の女神イナンナに他ならない。しかも、不老不死の仙桃であり、イナンナこそ、不老不死の原型である。そして、桃は「兆しの木」だが、西王母の原型がイナンナである以上、それは「死んだはずの者が蘇った、復活の兆しの木」なので「生命の樹」である。

葦を「よし」と言うのは宮中の忌言葉で、本来は「あし」であるから、葦原中国＝シュメールの暗示である。弓は、射手座が割り当てられている軍神ニヌルタの暗示である。

そして、マルドゥクの策略によってドゥムジを失ったイナンナとエンリル一族は、ニヌルタを司令官としてマルドゥク軍を木端微塵に粉碎した。

つまり、邪気を祓うこの追儼神事の表向きの意味は、邪気はマルドゥク一派で、それを粉碎したニヌルタとイナンナを暗示しているのである。“表向き”としたのは、ここまでは方相氏について述べていないからである。

(4) 方相氏と追儼

方相氏について考察するには、方相氏が黄金 4 つ目である意味を解き明かさなければならない。

方相氏



<http://www.linkclub.or.jp/~uno/A604yt-yoshidatsuina.htm>



<http://kotohurari.web.fc2.com/event/02yosi01.html>

鬼の様相をした方相氏が鬼を追い祓うという、よく考えれば、意味の解らない神事である。その秘密が、“黄金”“4つ目”にある。

黄金はニビルとアヌンナキの象徴だが、太陽が黄金の輝きに喩えられるように、光としての象徴でもある。だから、邪気である暗黒の鬼を光が追い祓うということであり、闇が去って光の世界へと至ることの暗示である。そうになると、単なる光ではなく、救世主の光であり、究極的には宇宙根源＝起源意識の大元の光ということである。ならば、4つ目の意味はどうか？1つ目から順を追っていこう。

・1つ目

この宇宙や生命体が現れる前の起源意識そのもの。神道に於ける一つ巴。唯一絶対神と言えるが、一般的に絶対神という言葉を使うと、聖書的な神をイメージしてしまうので、ここでは敢えて絶対神とは言わない。聖書の神は、シュメールの神々の集合体でもあるが故。

・2つ目

生命体のほとんどが2つ目であることから、プラスの陽子とマイナスの電子（と中性子）から成る起源意識から生成された物質界。神道に於ける二つ巴で、陰陽拮抗し、上昇も下降も無い。

・3つ目

よく言われる「第3の目」に相当する。これは、超能力的なものだけではなく

く、カバラの奥義を知って宇宙の真理を知る能力も意味する。

いずれの能力にしろ、その人独自の能力ではなく、本来誰にでも備わっている能力で、起源意識の力を意識的・無意識的に借用しているに過ぎない。

神道に於ける三つ巴で、陰陽の拮抗状態から脱し、螺旋的に上昇あるいは下降する。上昇は進化・発展だが、見方を間違えると、上昇しているつもりが下降していることになりかねない。すなわち、「生命の樹」に於ける上昇か、それを鏡像反転した「死の樹」に於ける下降状態の暗示。

現在の地球は、物質的豊かさの追求のあまり、精神性が蔑ろにされた「死の樹」に於ける下降状態である。「生命の樹」を上昇しているつもりが、必死に「死の樹」を下降してケリポット（精神の地獄）へと落ちこんでいる状態である。また、起源意識の力を意識的・無意識的に借用しているに過ぎないのに、自らが神と一体となったかの如く勘違いしている人たちも同様である。

なお、「第3の目」はいわゆる“ピラミッド・アイ”でもあるが、ここまでの考察から、“絶対神の目”ではないことは明らか。

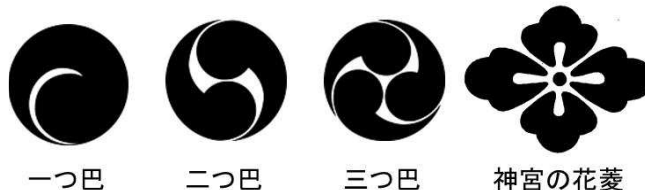
・4つ目

真理を悟り、起源意識と一体化した状態。この状態に至るには、すべての存在が起源意識の一部であり、それが起源意識全体を構成しているという自覚をすべての高等生命体（＝人類）が持つことが不可欠。

現時点では、人類はこの状態に至っていない。3つ目の状態の人類が一定数を超えた時点で一気に覚醒し、残されたすべての人類がこの状態に至ると考えられる。至ることができるかできないかが、“右と左に分けられる”などと預言されている。

神道に於ける花菱で神宮の御紋。中心の十字と丸が日本を暗示し（陰陽的に十字が四角と同等で日の丸となる）、4つ目に至るための中心となる国は日本であり、最終的に日本が世界の盟主になるということ。また、4枚の花弁は聖書で言うところの“神の戦車メルカバー”で、諏訪大社の御柱（おんばしら）でもある。御柱は上社本宮、上社前宮、下社春宮、下社秋宮で各4本の計16本であり、十六花弁八重表菊紋＝日本を暗示する。また、菱形も御柱もイナンナのシンボルだが、イナンナは豊受大神に重ねられ、根源神＝起源意識の暗示でもある。

すなわち、黄金4つ目で鬼を追い祓う方相氏は、起源意識の光（大元の光）でもってすべての闇を祓い、人類進化のあるべき姿を暗示しているのである。



人類が現在のような状態になってしまったのは、＜和多志＞で示されているように、エゴが原因である。そして、そのエゴは、自と他を区別する“名”から発生している。これを解決するためには、“名”を自他を区別するためのだけの方便とし、そこに“所有＝鬼”の概念を入れないことである。

故に、この方相氏が鬼を追いやる神事は“追儼＝追名”と呼ばれるのである！（なお余談ながら、追儼式当日に早めに見に行くと、鬼が参拝している姿などを見ることができ、笑える。）

他に、4つ目の鬼が登場する追儼式もある。東京の亀戸天神社である。黄金4つ目の赤鬼と青鬼が神職と調伏問答して負け、追われるが、こちらは方相氏が何故か鬼へと変化してしまった。故に、こちらの鬼は本来の鬼ではないため、黄色の鬼はおらず、赤鬼と青鬼だけなのである。

なお、亀戸天神社の社務所大棟の向かって左側の大棟鬼瓦には4つ目の赤鬼、右側には4つ目の青鬼の鬼瓦がある。



<http://members2.jcom.home.ne.jp/ichikondo/02%20kameidotennjinnshasetsubunntsuina.html>

4つ目がこのように現在までも残っているということは、かつては直感的だとしても、このようなことが解っていたが、いずれエゴによって解らなくなるため、真相を解明するための手掛かりとしたということである。すなわち、人類は物質的には進化したが、本来の進化の意味からすれば、退化したのである。

(5) 尾張の追儼式－儼追（なおい）神事

4つ目の方相氏などは登場しないが、“天下の奇祭”と呼ばれるこの祭りについても記しておく。＜日本の真相2＞に詳しく記してあるので、ここでは簡潔にまとめる。

尾張大國霊（おわりおおくにたまのかみ）神社で、毎年2月中旬頃行われる勇壮な祭りである。通称“はだか祭”である。

① 神男は神社でくじ引きにより選ばれる。

聖書に於いて、何かを決める場合、特に御神意を伴う場合はくじ引きで決められた。一般的には神男（しんおとこ）と言うが、正式には儼負人（なおいびと）と言う。儼負とは厄を背負うことであり、本来の儼＝厄とは、イエスが背

負った全人類の贖罪のことである。

②選ばれた神男は全身の毛を剃り落とす。

頭髮の剃髪だけならば、アダバがニビルの大神アヌの下へ連れて行かれた時、ボサボサだった頭を剃られたことが原型で、そこから派生してエジプトやフェニキアでは神官が剃髪し、神に対する恭順の姿勢を表わした。

しかし、全身の毛を剃るので、“毛が無い”ことは“怪我無い”ことに繋がる、祭りの安全無事を祈願するものである。(ダジャレは立派なカバラ！)

③御神事の3日前になると、神社に籠もって身を清める。

順序的には逆(合わせ鏡)だが、イエスが処刑されて3日後に復活したことの象徴。

④前々日に土餅搗神事並秘符認(つちもちつきしんじならびにひふしたため)が行われる。

旧正月11日早朝、あらゆる罪穢れを搗き込んだものと言われる土餅(前年の儼追神事に於いて焼かれた礫(つぶて)の灰を餅に包み、外も真黒に灰をぬった餅。土餅(どべい)、灰餅、儼追餅とも言う)を宮司が搗く。

土餅搗神事に引き続き、宮司が御神前に於いて“一宮・真清田(ますみだ)神社、二宮・大縣(おおがた)神社、三宮・熱田神宮、総社・尾張大國霊神社”の四柱の神様の御神名を奉書に認め秘符を作り、御鉄鉾(おてっしょう、3メートル程の大櫓で、儼追神事で使われる神籬(ひもろぎ))に結び付けるのが秘符認である。

秘符に書かれた四柱の神は、神の戦車メルカバーの象徴で、4つ目を暗示している。また、一宮と三宮を結ぶラインと、二宮と四宮を結ぶラインは十字架状に交差し、十字架を暗示する。

⑤前日に庁舎(ちょうや)神事が行われ、大鏡餅が奉納される。

庁舎神事とは、旧暦正月12日に境内東南の庁舎に於いて“一宮・真清田神社、二宮・大縣神社、三宮・熱田神宮、総社・尾張大國霊神社”の四柱の神様を招聘し、天下泰平・悪疫退散・五穀豊穰を祈る神事で、儼追神事の前夜祭である。この真意も前項同様である。

鏡餅は本来、正月にお供えするものである。大鏡餅が奉納されるのは旧暦正月12日で、旧暦ではほぼ正月に相当する。鏡餅の2枚の餅はそれぞれが鏡で「合わせ鏡」を象徴しており、上に太陽の輝きを表す橙が乗せられる。これで「生命の樹」を象徴する。上に乗せる柑橘類は橙に限られる。その字の如く“木を登る”こと、すなわち「生命の樹」を上昇することを意味するからである。

また、餅は酵母の入っていないパンが原型であり、酵母の入っていないパン

はユダヤ暦ニサンの月に行われる過越祭で食べられていた。ニサンの月はユダヤ宗教歴の年初めで、現行暦では3～4月に相当するが、旧暦の年初めに相当する2月～3月に行っている。

⑥当日（旧暦正月13日）、御神事の前に儼負笹（なおいざさ）が奉納される。

神社の神事では忌竹（いみだけ）が使われるが、意味はそれと同じである。“忌”とは“この上なく清浄”という意味であるが、イエスの死に関係しているのも“忌”であり、イエスは蛇神なので“蛇＝巳の心”ということで“忌”である。

また、笹とは竹のことであり、竹の旧字は“艸”を「合わせ鏡」で逆にした字である。“艸”は左右それぞれ3本の木から成る「生命の樹」であり、両方で「合わせ鏡」による古事記と日本書紀の絶対三神を暗示している。

つまり忌竹とは、イエスが掛けられた聖十字架の象徴で「生命の樹」でもあり、“儼を負う笹”とは、まさしくイエスが掛けられた聖十字架に他ならない。

イエスの磔刑はニサンの月14日（過越祭前日）と言われており、日数的には旧暦の正月13日と合わないが、これは12人の使徒とイエスで合わせて13人、ということ象徴しているからである。

⑦祭りに参加する裸男は、白い下帯1枚の姿になる。以前に神男を務めた者たちが全裸の神男を取り巻いて守り、参道に出る。なお、裸男から赤い儼負布（なおいぎれ）をもらおうと御利益がある。

イエスは十字架に掛けられた時、衣服を剥ぎ取られた。それ故、儼負人は全裸となる。

裸男は本来、裸である必要は無い。儼負人が全裸で厄を背負い、儼負人に触れると厄が落ちるのであれば、儼負人だけが裸だと目立って人が殺到し、大変なことになる。そのため、祭りに参加する男たちは下帯だけを付けた裸になり、儼負人の影武者も登場する。

儼負布は剥ぎ取られた血染めの衣服を象徴している。剥ぎ取られた衣服はくじ引きでローマ兵に分けられたが、イエスが身に付けていた神聖な布であるため、それを象徴する赤い儼負布をもらおうと御利益がある。

⑧神男はすべての厄を受けるので、神男に触れた者は厄が落ちる。そのため、裸男たちは争って神男に触ろうとする。

イエスが全人類の贖罪を背負って十字架に掛けられたことの象徴。

⑨神男は最後に儼負殿（なおいでん）に引き入れられ、表向きの祭りは終わる。

儼負殿は聖域であり、十字架に掛けられたイエスが死んで聖域＝天国に召されたことの象徴。

⑩翌日の午前 3 時に庁舎に於いて夜儺追（よなおい）神事が行われ、祭りは終了する。

表向きの祭りが終了した翌日の午前 3 時に庁舎に於いて斎行される、はだか祭の本義。儺負人に土餅を背負わせ、御神宝の大鳴鈴（おおなるすず）や桃と柳の小枝で作られた磔（つぶて）で追い立てて、境外へ追い出す。追い出された儺負人は、家路につく途中で土餅を捨てる。この土餅を神職の手により埋めることで、世に生じた罪穢悪鬼を土中に還し、国土の平穏を現出する。称徳天皇の御世より現代に至るまで最も神聖視され、重要視されている。

イエスは十字架刑と“復活”により人類の贖罪を清算したが、儺負人は多くの人の厄を受けたままである。その厄を落とすために、このような神事が行われる。特に桃は、厄除けや悪霊祓いに使われる。

このように、尾張大國霊神社で行われる儺追神事の真相は、イエスの磔刑場面の再現である！そして、方相氏は登場しないものの、尾張の 4 つの宮の四柱の神々が 4 つ目に相当し、儺負人に背負わせて追放される真黒に灰をぬった土餅が暗黒の闇を暗示する赤鬼、青鬼、黄鬼に相当する。何よりも、この神事もまた、“儺追＝名追”なのである。

なお、四宮の尾張大國霊神社と二宮の大縣神社を結ぶライン上には、田縣（たがた）神社がある。大縣神社も田縣神社もまた、天下の奇祭で有名なので、簡単に紹介しよう。

(6) 尾張の奇祭

大縣神社の姫之宮では玉比売（タマヒメ）命が祀られ、姫之宮の祭りでは、女陰を象った神輿を中心とする神幸行列が行われていたが、戦後、風紀上の問題があるということで、現在は女陰を模した鏡餅神輿などに変わっている。また、奉仕行列の女性たちは頭から衣を被っているが、白い衣が“ヒダ”を、顔の部分が“核”を暗示した女陰姿である。境内には、女陰を象った石の御神体があるが、これを陰と見るならば、対する陽は小牧の田縣神社である。

田縣神社の祭神は御歳神（ミトシノカミ）で、豊年祭では男莖形（おわせがた、男根）が奉納される。男莖形は神輿として担がれ、それに続く巫女行列は男莖形を胸に抱く。特に、この田縣神社の豊年祭は外国からの観光客やマスコミが殺到して世界的な“珍ネタ”として話題となっており、両社ではこれに因む様々なグッズも販売されている。

田縣神社の豊年祭が 3 月 15 日であるのに対し、大縣神社は 3 月 15 日以前の日曜日に豊年祭が斎行されるが、かつては同じ日に斎行され、男莖形を女陰を象った神輿にぶち込んで終わっていたという。まさしく、“世紀”の“珍祭”である。

大縣神社姫之宮の御神体



大縣神社の行列



大縣神社の神輿



<http://tsumujikaze2.blog.so-net.ne.jp/2014-03-10>

田縣神社の男莖形



田縣神社の行列



<http://www.geocities.co.jp/MotorCity-Circuit/8992/tagata.htm>



<http://www.geocities.jp/sjtsunoda/kisai/ooagatajinja.html>

尾張大國霊神社を含めた並びは、東から見て向かって右が大縣神社、中心が田縣神社、左が尾張大國霊神社である。これは、東から見たピラミッドの並び方と一致する。

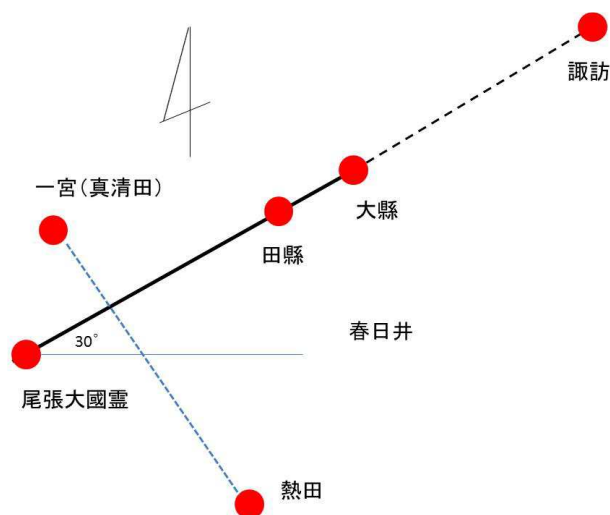
- 尾張

慈悲の柱：大縣神社（女陰）、均衡の柱：田縣神社（男根）、
峻厳の柱：尾張大國霊神社（復活）。

- エジプト

慈悲の柱：クフ（イシス＝女神）、均衡の柱：カフラー（オシリス＝男根）、
峻厳の柱：メンカウラー（ホルス＝復活）。

エジプトでは三柱の太陽神が崇められたが、この地域の真東には“春日井”という地名があり、“三人（の）日”と書く。



また、尾張大國霊神社－田縣神社－大縣神社のラインを延長すると、諏訪大社に行き着く。諏訪大社の御神体は守屋山であり、これはエルサレムのモリヤの丘に因む。尾張大國霊神社から真東のラインを基準とすると、尾張大國霊神社－田縣神社－大縣神社－諏訪大社のラインは約 30 度となり、ピラミッドのあるギザから真東のラインに対して、エルサレムがある方向の角度とほぼ一致する。そして、諏訪大社と言えは御柱であり、前述の“4 つ目”の話に行き着く。

*おまけ

最近の節分では、関西発祥の恵方巻きを丸かぶりする風習が流行っている。関西寿司組合が海苔の販売促進のために始めた、というのが表向きの理由だが、どうも始めたのは大阪の旦那衆らしく、芸者に黒光りする海苔巻を丸かぶりさせて楽しんでいたとか。。。 (“珍” 風習)